
ポケモンの世界に来てしまいました。

追憶の俺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンの世界に来てしまいました。

【Nコード】

N1489Y

【作者名】

追憶の俺

【あらすじ】

目覚めたところ、そこはポケットモンスターの世界でした。

はじめに

どうも、はじめまして。追憶の俺です。小説を書くのは初めてなので、至らぬ点などございますが、宜しくお願いします。なお、不定期連載になるかもしれません。

この小説は、後に最強系オリ主、非公式のポケモン、地方などが含まれています。そうゆうのが苦手な方は「もどる」おススメします。ちなみに何処かの催眠厨のように伝説で無双などはしないかもしれません（笑） それでもOKなかたは、次の話へお進みください。

素敵な冒険（笑）の始まり始まり

第一話（前書き）

あまりにもグダグタなので修正
第一話です。どうぞ

第一話

第一話

あ……………れ……………？

「此処…何処だ？たしか……………昨日寝てそれから……………駄目だ全然思
い出せねえ……………」

見渡すところ緑の木々ばかりで何処かも分からない…多分森に迷っ
たんだろっ…多分

「さて、どうする…かな」

青年が歩みだそうとすると、何か黒いものが飛び出した。
そして青年を見つめる…

「ん……………？」

青年が目を擦り、再度確認する

「ちよつとまでよ…？こいつどっかで見たことあるような……………え
……………マジ……………か…？」

突然出てきた「何か」を青年は知っていた…否、彼にとっては知
らないはずもない

「夢……………じゃないよな……………」

それがこいつとの旅の始まりだった

T o b e c o n t i n u e d

第一話（後書き）

次回、主人公の名前が出てきます。

第二話（前書き）

一話目です。さしづ

第二話

「黒いやつ」と出会って数分経ち……未だに森の中をさまよっております。この歳で迷子だなんて……で、その「黒いやつ」は……

「ズバツ！ズバツ！」

と、多分「あつちだ」と道案内してくれているようです。ちなみにこいつは多分ズバツトというポケモン……だっけ

まあ簡単に言えば……俺は「ポケモン」の世界に来ちゃったらしいです。

いやぁ驚きましたね、なんせ目の前にズバツトがいるんだから、変なテンションが出ております（笑）

……あ……自己紹介がまだだったような気がする……
でわ改めて、俺の名前は「九堂 椿」この世界だと「ツバキ」になるのかな。

ポケモンは努力値とか個体値厳選とか、なんか廃人っぽいことしてましたね。

んで、この黒いのか「ズバツト」まあ真っ黒ってほどじゃないけど、ベルトに付いてたモンスターボールを確認してみると、どうやら所有者は俺らしいのでパートナーとゆうこにしておきます。初めてのポケモンがズバツトだって？まあ育て方によって無限大の可能性があるので気にしません

もちろん元の世界に帰ろうなんて微塵も思っていないません、というか方法が無いという（笑）

此処に来た以上、とことんやっつけてやりますよ

第三話（前書き）

三話目です。さしげ

第三話

前は「とことんやってみますよ」と言っただものの、まだ森の中を彷徨っております。……自分が恥ずかしいよ。

それと驚いたことがもう一つありました。近くに綺麗な水辺があったので顔を洗いに水面を見ると……

「え……これホントに俺デスカ？」

そう、顔が別人みたく変わっていました。しかもHG・SSのライバルに瓜二つという。……漫画と名前同じだから？……あれ、もしかして憑依したの？俺？

……なんかツッコむの疲れてきたよ。

まあ、どちらにせよ此処を抜けないと旅は始まらないんだからさっさと此処を抜けないとな……

と、ツバキはズバットを見てある提案を思いつく。

（たしかこいつ「そらをとぶ」使えたような気が……それにもし憑依しているのならきつと技マシンがあるはず……）

ツバキは、腰にあるポーチからディスクが数枚入ったケースを取り出し、ひこうタイプのディスクを探す……あつた。

「へえ、一応見た目は普通のディスクにみえるけど……試すか……えーっと、これをこうして……」

付属の説明書を見ながら準備をしていく。

しばらくお待ちください……

「うっし、これのできるはず……ズバット！こっち来てくんないかな？」

「ズバ？ズバツ」

と、ズバットは嬉しそうにツバキの方へ飛んでいく

「よし、んじゃ、ここをこうして……セット！」

……………ズバットは新しく「そらをとぶ」を覚えた！

「じゃ、いくか！ズバット、そらをぶ！」

「ズバツ！……」

そして俺たちは大空へと飛び立っていった……

「さあ、冒険の始まりだ！」

第三話（後書き）

なんか打ち切りみたいな終わり方しましたが、まだまだ続きます

（笑）

「そらをとぶ」使用時のポケモンのサイズとかはまあ、仕様なので
気にしな（ry

ツバキ「やかましい」

ぶぶおおおおおお！？

ツバキ「次回もお楽しみに」

第四話（前書き）

すこし更新が遅れました。では、どうぞ

第四話

あの日から一年経ち……今、カントー地方にいます。はい、飛ばしすぎですね。

あれからホウエン、トーホク地方をまわって今のようになっております。ちなみにトーホク地方は非公式シリーズの地方で、カントーの遙か北の方向にあります。

あと一年間パートナーだったズバットはというと……

「ズバット！」

はい、進化させずにそのままにしております。ポケモンは、進化前でもやたらと強い個体も作ることも可能なのです。ズバットでも。

ズバットでも。（大事なことなので二回言いました。）

さて、今どこにいるのかというと、ニビシティにきております。

多分ジムリーダーはタケシのはず……なのですが……

「おまえが挑戦者か？俺が相手をするぜ。」

聞こえた声は幼い声、あれ、タケシじゃない……

「あれ、タケシはどこだ？」

思わずそう聞いてしまった。すると

「ああ、兄ちゃんなら旅にでたぞ。」

はあ！？なんで旅に出てんだよ！？ってことはアニメの世界に来たのか俺は……何かの冗談ですよ、ははは……だって一年も旅して

たんだから、きずかないはずが……

「はあ……んじゃ、やるか……」

ため息をつき、だるそうに言う。

ああ、なんかため息ばっかだなあ……

「では、これよりジムリーダー vs 挑戦者ツバキの試合を始めます！なお、ポケモンの入れ替えは、チャレンジャーのみとします！」

ジムリーダーよりも幼い声はきはきと言う。……兄弟何人いんだっけ？なんか観客席つばいところも同じ顔してる奴いるし。おっと、始まりそうだな。

「それでは、始め！！」

高らかに声がスタジアムに鳴り響く！

さあ、始めようか！！

「バトル スタンバイ！！」

戦いの火蓋は切って落とされた……

第四話（後書き）

「なあ」

ん？

「なんで飛ばした？」

え、えーっと、その、「じしゅじつせしぐぱあああ！？」

「次回もお楽しみに」

……なあ

「ん？」

なんでここにいるんだ……？

「そらをとぶ」

えー！……

第五話（前書き）

五話目です。どうぞー！

第五話

「それでは始め!」
と、高らかに声がジムに鳴り響く。

「ゆけっ!ハガネール!」

ジムリーダーはハガネールか……タケシのやつだよな。絶対。はあ、
どんだんアニメフラグが……

「……バタフリー、バトルスタンバイ」

ダルそうに言う……まあ出すとき「バトルスタンバイ」って言った
のは、迷ったんですよね。最初。んなわけでシンジくん、餃子あげ
るからさ、許してね。

さて、相性的にはこちらの方が不利だが、こっちには秘策ある……
といってもゲーム世界の一般的戦略だが。

「相性ではこちらの方が有利、交代するかい?」

「まさか、こいつで……倒すんだけど。」

「!!……わかった、ハガネール!いわなだれだ!!」
いわなだれがバタフリーに直撃すると思われたが……

「!いない!?!」

「後ろだよ、ねむりごな!!」

と、バタフリーは緑色の粉をハガネールに振り掛け……

「ネーール!?!……zzz」

直撃し、眠り状態に。もともと素早さが低いこと、そしてバタフリ
ーの特性である「ふくがん」によってかわすことはおろか、至近距
離で撒いたのでは確実に当たるはず。

「くっ……でもどうやって攻撃を……」

「簡単な事、みがわりさ」

「……」

そう、「みがわり」は自分の体力を削って、代わりに自分の「ダミ
ー」を出す変化技。

一般的にはこの間に積み技とか、やったりするのかな

さあ、この嫌がらせをジムリーダーさん、突破できるかな？（笑）
そっぴや、このジムリーダーの名前、なんだっけ

「なら……もどれ！」

おっ、交代か、眠ってたらいかに自分が不利になるか解ってるね、
さあ次は何しようかな……

第五話（後書き）

はい、ツバキが危ないです（笑）

私自身バタフリーにはハメられましたので……

次回もお楽しみにっ！

第六話 (前書き)

六話目です。相変わらず短いですが、どうぞ

第六話

交代か……さあどうするか……んーなんか忘れてるような……

(交代はチャレンジャーのみとします！)

……あ……忘れてるね。完全に

「なあジムリーダーさん。」

「……??」

気づいてねー……

「あのさー、交代ってチャレンジャーだけじゃあなかったっけ？」

「………！………！………！す、すみませんでしたー！！！」

おiiiiiiiiiiiiiiiiっ！！覚えとけよおおっ！！

心の中で叫ぶ。てかジムリーダーさん。覚えようよ。マジで。そんなリアルに土下座されてもなあ……

「じ、じつは最近ジムリーダーを任されたばかりで………」

……なる。ってかこんな子供に押し付けるのか……そもそも子供でもジムリーダーになれるのか？あんま覚えてないや。

まあともかく……

「まあ……基礎くらいは覚えようか」

「……はい……」

なんかこいつほんとにジムリーダーか？って思ったわ……はあ、疲れる。

「と、とりあえず……もういつかい、出て来て、ハガネール」

「……zzz」

やっぱり寝たまんまか……しゃーない、バトル続行だな

後でハガネール誰のか聞いておこ

第六話 (後書き)

はい、交代はチャレンジャーのみなのに何故入れ替えたか。そのり
ゆうを書いてみました。次からはマトモなバトルをします。……多分
ツバキ「多分かよ」

では次回もお楽しみ

第七話（前書き）

我慢できなくなりました。
すいません、七話目です。どうぞ

第七話

取り敢えずバトル続行とはなったが、まだツツコんだところあったよね。例えば「使用ポケモン」とかさ

聞いてみたところ、やっぱり審判忘れてたらしい。一応確認だがこの世界のジムバトルは大体は「使用ポケモンは三体」のシングルバトルで行う。道具については使用は禁止、持たせるといのはまだ広まってはいない。俺が旅したトーホク地方は持たせるのは実用化されていたが広まるまではまだまだつてとこ……かな

ツツコミ所満載だが仕方ないかな……

「さて……バトルするか」

「は、はいっ！」

うん、緊張してるね。それはさておき……今ハガネールは眠っていて立場的には不利。しかし、あのハガネールが借りたやつだとすれば……眠っている状態でも行動可能な唯一の技、「ねごと」を覚えている可能性だってある。防御の種族値が200とパルシエンをも超えるタフさでタイプ一致の弱点技を食らってもまず落ちない。

対する特殊技には弱くタイプ不一致でも弱点を突かれれば一撃で倒されることが高いという欠点がある。

よりタフにするなら「ねむる」そしてそれを併用した「ねごと」を覚えていても別におかしくは無いと思う。現に「ステルスロック」を撒いて「ほえる」で交代させたり、相手の防御が高ければ「どくどく」んでピンチになりゃ「だいはくはつ」といったやらしい型も存在するんだし混ぜても悪くはない

まあそれに気付いたらいいんだが……多分無理だろう。バトルの経験が浅そうだし……一つ助言でもしてやろう

「ジムリーダーさん、確かに眠っていたら不利にはなるが……逆にそれを利用して相手の意表を突くことだって出来るんだよ？」

「……！！」

「まあ大事なのは、焦らないこと……そして、どんなにピンチになっても必ず諦めないこと！」

「……っ！？……はい……俺は絶対に諦めない、そしてあなたを倒します！！」

うん、良いよ良いよ。やっぱり諦めない心っていうのはとても大事。最後まで何が起こるか分からないのがポケモンバトルの良いところだよな

「いくよ、ハガネール！！」

「ZZZZ……」

「やはり眠っているけど何か方法が……！！そうか！」

ん、何か気付いたみたいだな

「眠っているときにも出来る事……ハガネール！ねごとだっ！！」

ハガネールは銀色の粒子に包まれながら回転し、バタフリーに突っ込んでいく……

あれは……ジャイロボール!?「バタフリー!!!来るぞ!」

「フリ〜〜〜!」

バタフリーもそれに応答し、交わす

「あくむ!」

バタフリーの目がハガネールに向かって怪しく光り、ハガネールが段々苦しそうな顔になっていく

「!ハガネールっ!?!」

「あくむ……それは眠っている相手に徐々にダメージを与えていく変化技……さあいくよバタフリー!止めのねっぷう!」

「フリ〜〜〜〜っつ!」

羽を飛ばたかし、灼熱の突風がフィールドに吹き荒れる。元々の特防の低さ、そして「あくむ」のダメージで当然……

「は、ハガネール、戦闘不能!バタフリーの勝ち!」

「……もどれ!……よく頑張ったね、ありがとう」

やはりポケモンに対しての愛情は人一倍あるな。絶対良いトレーナーになれるよ。あの子ならね

さて、面白くなってきた!!

第七話（後書き）

はい、投稿してしまいました……すいません

「あくむ」は二世代で覚えます

主人公紹介（現七話まで）（前書き）

はい、中途半端ですが、どうぞ。

主人公紹介（現七話まで）

主人公：ツバキ（九堂 椿）

何故かこの世界に突然トリップしてしまった青年。年齢は17。現実ではそこそこ勉強、そこそこの身体能力と中途半端さをずっと通していたが、ポケモンの事に関しては、密かにやり込み、そしてついに「廃人」と化した。両親曰く、「勉強もあれくらい頑張ってくれたら良いのに」と呟いていたんだとか。たまに「餃子あげるから許してね」とかキャラに対して訳の分からない事を言うが、分かる人には分かる「ネタ」なのであまり気にしない方が良いのかもしれない。

性格は少しめんどくさがり屋。つつこみ役でもある。こんなんだが実はトーホク、ホウエンを一度制覇してチャンピオンの称号を勝ち取った。（両方ともすぐに辞退。彼曰く「もつと旅を続けたい」とのこと。そのためか、最近、各地方でツバキを探す人が増えたんだとか）

現在判明している使用ポケモンはスバット・バタフリーの二体。ズバットはこの世界にきて以来ずっとパートナーとしてツバキと共に旅をしてきた仲間である。某マサラ人のピカチュウ的存在。まだまだ公開していないポケモンもいるが中には「神と呼ばれしポケモン」もいるんだとかいないんだとか。現在カントー地方で旅をしている。

主人公紹介（現七話まで）（後書き）

はい、無駄な所とか沢山ある気がしますが、気にしないでください（笑）他にも更新次第随時更新する予定です。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1489y/>

ポケモンの世界に来てしまいました。

2011年11月24日00時47分発行